新春企画

留萌びとの未来みるチカラ

深刻、まちの高齢化

▼留萌市の今置かれている現状は決して楽なものではありません。

まず大きな問題となるのは人口の減少と高齢化です。市の人口は昭和42年の４２、４６９人をピークとして減少し、平成１３年には２８、６８４人とピーク時の68％まで減少しました。(数字は留萌市統計書Ｈ14年度版による。以後同じ)平成3年の人口が３２、２７８人ですからこの10年だけを見ても年平均で人口の約２％にあたる３５９人の人達が毎年留萌市を離れていったことになります。

▼次に年齢別の人口構成でみてみますと65歳以上の老年人口の総人口に占める割合はこの10年で12・９％→18・６％に上昇し、15歳～64歳までの生産年齢人口は69・２％→67・２％、14歳以下の年少人口は17・９％→14・２％まで減少しました。高齢者がまちに残り、若年者がまちを去り、出生率が低下するという構図ができあがりつつあります。

減少、産業と雇用

▼留萌市の場合について見てみると各産業別(農林・林産・畜産・水産・工産)の粗生産額合計はＨ8年には約38億円あったものが、Ｈ12年には約29億円と約4分の3へと減少しています。

留萌市の第1次産業、第2次産業、第3次産業の従業者数の合計はＨ8年に１７、８１７人でしたがＨ13年に１７、５０５人と98・３％に減少しています。さらにこれらの従業者が稼ぎ出す所得金額の合計は約４３８億円から約３９９億円と91・１％へと大幅に減少しています。

▼雇用も厳しい状況が続いています。留萌公共職業安定所(留萌市・増毛町・小平町・羽幌町・苫前町・初山別村)によると平成9年度には１４、００９人であった月間有効求人数は平成13年度には１１、５３２人と20％近く減少しました。一方で月間有効求職数は２３、５８６人から２３、４８９人とほとんど減少していません。

さらに失業給付金給付状況(一般求職者給付)の初回受給者数は平成9年度９００人だったのが平成13年度には９６６人に増加しています。

今後も景気の回復のめどが立たないとさらに雇用情勢が悪くなる恐れがあります。

危機、留萌市の財政

▼市の財政状況も平成13年度予算は基金と市債での穴埋めを除けば8億2千4百万円の赤字となりますし、長引く不況のあおりと地方交付税制度の見直しにより市税は約1億円、地方交付税が1億8千万円のマイナスとなってます。

財政危機の目安となる数字の一つ経常収支比率(一般財源収入に対する人件費などの義務的経費の割合)は95・６％となっており、全道の中でも8番目に高い数字となっています。財政が弾力的に運用できるのは、この数字が80％以下の場合とされていますからかなり危機的な状況であることは確実です。

▼こうした状況の中で、国なども含めて支出の削減が叫ばれており、そのあおりをうけて、いわゆる公共事業も削減の傾向にあります。工事数の減少が工事受注の競争激化と請負価格の下落を引き起こしており景気の悪化の一つの要因となっています。

未来、ゆめみるチカラ

▼今回は17名の方々がさまざまな「ゆめ」や希望を語ってくれました。思い描いている内容はそれぞれに異なりますが、みんなが自分なりに「ゆめ」の実現に向かっていく気迫が感じられるように思えます。現実が厳しいからこそ、「ゆめ」をみることがこの状況に立ち向かっていく勇気を与え、先にあるいろいろな困難を克服してゆく力になるのではないでしょうか。

▼ゆめにすら出てこないことは将来もないはずです。

るもいびとの「ゆめみるチカラ」が明日を創り、未来の留萌を動かしてゆくのです。

あなたは今年どんな「ゆめ」をみますか？

Norihiko in パッション・トーク

みんなの想いがひとつになったとき、

本当に素晴らしい「夢空間」が創りだされた

笑いと涙と感動の夢空間

▼11月24日留萌文化センター大ホールは、笑いと涙と感動に包まれました。400名の観客と舞台がひとつにとけあった瞬間でした。

障害者の日記念事業として開かれた舞台は「夢空間」と名づけられ、たくさんのプログラムがありましたが中でも、極め付きは多くの障害者の皆さんが総出演した演劇「ニシンの恩返し」でした。

▼「本当に自分たちができるのだろうか？　演技は？　セリフは大丈夫だろうか？」そんな不安がいっぱいだったそうです。

でも自分たちは「ほんの少しの手助けがあればできる。もっと社会に出て地域の人々とふれあって、地域の一員として生活していきたい」という強い想いが、みんなの心を動かしました。

そして2ヶ月もの厳しい練習に耐えて舞台に立った人達も、裏で支えてくれた多くのボランティアの人たちも、そして観客も、みんなの想いがひとつになったとき、本当に素晴らしい「夢空間」が創りだされたのです。

▼私はその翌日、出演した皆さんがふだん働いているかもめ共同作業所を訪ねました。

職場の雰囲気がすっかり明るく一変しているのに驚き、いつもはほとんどしゃべることのない人が、セリフのない配役に抗議したという話に驚き・オドロキ…の連続でした。

「ふれあいの家」では、みんなが口をそろえて「また、やりたい」と言っていました。

▼障害者といわれている人たちが特別なのではなく、健常者と思いこんでいる人達も含めて、人間が持っている多くの個性のひとつだと考えられるようになってきています。

どちらかといえば、このような行事などでは受身になりがちだった障害者の人たちが、主役になり、自信と明るさをつかんでいく姿をみると、これからの社会に大きな希望を見いだした思いがしたものです。

るもいびと・倶楽部

会員の和を大切にして、歌を楽しむことがモットー。

歌を通してチャリティーに心を

相内（あいうち）　正紀（まさのり）さん

留萌歌謡フレンドリー会長

私たちの留萌歌謡フレンドリーは、昭和59年に歌が大好きという仲間が集まり、生バンドで歌う会として結成、歌を通して絆を深めてきました。現在会員は20名です。

好きな歌でささやかでも社会に貢献できたら、と願い始まったのがチャリティー発表会です。

前回までは生バンド演奏でしたが、平成14年の第18回チャリティー発表会からカラオケでの発表になりました。

過去10年間のチャリティー発表会の益金の寄贈先は、特別養護老人ホーム萌寿園、鬼鹿更生園、手をつなぐ親の会、かもめ共同作業所、ふれあいの家などです。また、大勢の人たちが被害に遭われた阪神淡路大震災の時には、留萌市を通じてささやかではありましたが、義援金を贈らせていただきました。

会員の和を大切にし、歌を楽しむことがモットー。留萌市文化会議に加盟、市内の歌好きな仲間との交流、平成14年には第27回留萌市民芸術祭合同発表会や10月に幌延町で開かれた留萌地方道民芸術祭地方祭にも出演しました。

これまでも小平町の鬼鹿更生園はじめ留萌市の萌寿園、介護老人保健施設サンライズ留萌などを訪問しています。私たちは地域の人たちとふれあい、歌を通してお役にたつところがあればどこでも出かけたいと考えております。今後も地域のみなさまのご協力をいただきながら、活動の場を広げていきたいと思っております。

ただ今、会員募集中です。歌の好きな方に仲間になって欲しいと思います。毎月第一、第二、第四日曜日、午後6時半から双葉会館で練習しています。連絡は、事務局の清水(☎42・3446)まで。

次回は、留萌スキー連盟会長の東宏俊さんを紹介します。